朝鮮の開化と井上角五郎

——日韓関係史の「脱構築」を促す問題提起——

金　鳳珍

はじめに

> 朝鮮の改革は尋常一様の手段にて其の効を奏す可きに非ず，現在政治の彼が如くに腐敗し彼が如くに衰頽したる積年の弊害の深く其の根本に浸み込みたるもの在ればなり，近く朝鮮政府が日本の勧告に由りて着手したる改革の如きは全く形式に止まり議政府を更めて内閣と称し領議政を更めて総理大臣と呼ぶも毫も現在の政治に損益する所なきものなり，故に苟も朝鮮の改革をして十分の効を奏せしめんと欲せば其の腐敗衰頽の根本たるものを探求し而かも一大果断を以て之を一変せざる可かず，予を以て見れば腐敗衰頽の根本は実に其の地方制度に在りとするものなり

これは，井上角五郎（当時，衆議院議員）が1894年10月に朝鮮に赴かんとする井上馨公使に提案した「朝鮮改革意見」(1)の冒頭文章である。「朝鮮改革意見」は20カ条の地方制度の改革案である。たとえば「(一) 観察使節度使統制使を廃止すること，(二) 一都四府一州及び府県州郡鎮萬戸察訪は共に之を廃止して新たに四十乃至五十の府県を設置すること」のように分類されており，その他にも，地方官の任免，租税の徴収，地方の司法・裁判，兵備の監督などが含まれている。朝鮮は伝統的に郡県制度を設けてきたが，実は封建制の要素が多い。それゆえ，中央統制はうまく効かず，それが「腐敗衰頽の根本」になっている。したがって，朝鮮政府は地方制度を改革し，地方を直接管理すべきだと

いうことである。

この改革案自体がどれほど井上公使の朝鮮改革構想に反映されたかは定かでない。が，井上公使が朝鮮政府に提示した20カ条の改革案の中には，中央の内閣，行政，財政，裁判，軍隊などの制度改革案とともに地方制度の改革案も含まれていた。もっともこれらの提案を待つまでもなく，当時の朝鮮政府（の軍国機務処）——同年７月に日本の対清宣戦布告と日本軍の王宮占領を機に成立した甲午改革政府——は広範囲の改革（甲午更張）を進めていたが，その中にも地方制度の改革は当然含まれていた。ただ，当時の朝鮮は国内の東学農民戦争と国（内）外の日清戦争の真っ只中にあり，「改革をして十分の効を奏せしめん」ことは無理であった。

上記のような井上角五郎の主張はおそらく朝鮮滞在の経験を持って以来，彼が抱いてきた持論であろう。そして，それは朝鮮の開化派（なかでも急進開化派やその同調整力）の主張でもあったと思われる。朝鮮は郡県制の中央集権国家ではあっても，同時に広範囲の地方自治を行なっていた面では，封建的な色彩の濃い地方分権国家でもあった。それだけに中央と地方の一元的なかつ徹底的な統制ができず，それが近代国民国家の建設には大きな障害要因になっていた。朝鮮の開化派も中央と地方の制度全般の改革が必要である——開化派の流派別に改革の範囲，方式などをめぐる意見の差はあろうが——と考えていた。開化派が多数を占める甲午改革政府にとって，井上角五郎の改革案（の内容）自体は朝鮮の近代化の成功的な推進を願う「有り難い」提案であったに違いない（甲午改革政府は，たとえ井上公使が朝鮮の「親日化，保護国化」を狙う日本の対朝鮮政府の代理人であったとしても，彼の改革案に対しては，それを評価し，それに沿って改革を行なったと言える）。

しかし，かりに井上角五郎の改革案が「有り難い」提案であったとしても，その動機（日本式に言えば，本音）がどこにあったのか，あるいは，その動機が「純粋」なのか「不純」なのかを問わなければならない。否，この件に限る

こともなく，彼（実は彼を含む明治時代の日本人）のいう朝鮮の改革，独立などの言葉の裏にある動機を問わなければならない。さらに，できればそれが場所や状況によってどのように変わったのかをも考察しなければならない。本稿の主な目的はこうした問題提起を念頭に置きながら，井上角五郎にとって朝鮮の開化（改革や独立）とは何を意味していたかを問うことにある。ただ，本稿では井上角五郎（関連）の様々な著作の中で極一部の言説を検討の対象とする。その際，「動機」に注目する理由はその「純不純」を誉めたり，責めたりするためではなく，彼の朝鮮に関する言説などを「脱構築」し，思想内面的に省察したいからである。それゆえ，筆者はさらに，日朝両国の近代史をどのように理解するかという問題も考えてみたわけである。

一　朝鮮滞在中の内外情勢

井上角五郎（1860～1938年）は，壬午軍乱後に日本に派遣された特命全権大臣兼修信使朴泳孝一行が帰国する際に，一行に同行して朝鮮に入国し（1883年1月），それ以来1886年12月に日本に帰るまでのほぼ4年間を朝鮮で過ごした。その間に彼は，『漢城旬報』（83年10月から84年12月の甲申政変まで）や『漢城周報』（86年1月から88年の7月まで）の発行に携わる一方(2)，他方では，初期開化派の官僚や知識人と交遊したり，急進開化派による甲申政変に「加担」したり，あるいは，朝鮮の国内情勢を観察したり，帰国直前には朝鮮の南部地方を旅行している。これによって，彼は朝鮮社会を様々な方面から見聞し，体験した。

井上角五郎が朝鮮に滞在していた4年は，朝鮮にとっては，「伝統から近代への大転換」という世界的な潮流の不可避性を自覚し，まさに大転換の政策路線を模索し始めた時期である。なかでも前半の2年は，もはや後戻りできない改革・開化（と欧米諸国への開国）の基本路線の下で，穏健と急進，清国型と

日本型（及び欧米型）の開化，そして，朝貢体系の維持と打破などの「戦術的」路線が複雑に錯綜するかたちで朝野が「熱病」にかかっていた時期である。壬午軍乱を機に初期開化派は，大別して穏健と急進の両派に分かれ，互いに葛藤し，または対立した。そして甲申政変まで，朝鮮の政局は両派それぞれの「戦術的」路線（穏健開化路線と急進開化路線）の間で揺れ動いていた。後半の2年は――政変の失敗後に急進開化派が追い払われて――一応穏健開化路線が主流になった時期である。ただ，急進開化路線はまったく放棄されたわけではなく，それが傍流にはなったものの朝野（の一部勢力）の中に様々なかたちで変質し浸透し，時々噴出していた（そして，10年後の日清戦争の勃発を機に爆発的に噴出した）。

国際政治と関連させて見れば，欧米諸国と外交関係が始まったばかりのころに（82年7月の壬午軍乱を鎮圧するに際して派兵された）日清両国軍が漢城に駐屯し，しかも清国は軍乱の首謀と目された大院君を拉致（天津近郊の保定府に幽閉）する一方，他方では，日本や欧米諸国の勢力拡張を牽制するために朝鮮の内治や外交に干渉していた。これは，清国の北洋大臣（対朝鮮外交の責任者）李鴻章や彼と協調関係にあった穏健開化派の金允植のような人物にとっては，朝貢関係の強化によって朝鮮を保護あるいは保全しようとする苦肉の政策だったと言えよう。が，日本（と欧米諸国）側やその協力を求めていた急進開化派にとっては，これは「内治，外交は自主」という伝統的な朝貢関係を変質させて朝鮮の実質的な「属国化」を招く恐れのある内政干渉の政策に他ならなかった。それこそ急進開化派が政変を起こす主因となったのである。甲申政変の際に日清両国軍が衝突したことを「反省」し，政変後に両国の駐屯軍は撤収したが，清国の干渉はさらに強化された。これに対して朝鮮は，反清勢力とも言うべき急進開化派の多数が除去されたにもかかわらず，対清牽制のため，いわゆる朝ロ密約事件（第一次：1885年春～夏，第二次：1885年冬～1886年夏）を起こした。逆に清国は，朝鮮朝廷（特に閔妃勢力）の反清感情を押さえるた

めに，1885年９月に（反閔勢力の首謀でもある）大院君の帰国措置を取り，同年11月には袁世凱に駐箚朝鮮総理交渉通商事宜という職を与えて再派遣し，朝鮮を「保護」しようとした。また（当時清国と親密関係にあった）英国は，ロシアの朝鮮進出を牽制するという名目で巨文島占領事件（85年４月に占領，87年２月に清国の仲介によって撤退）を起こした。

二　著作と歴史理解の問題

井上角五郎ら自らの朝鮮体験談を書いた『漢城之残夢』（東京：春陽書楼，1891）を残している（これには金玉均と朴泳孝の序文が寄せられている）。また，朝鮮の国内情勢を記した「朝鮮日誌」，朝鮮南部の旅行記である「朝鮮遊覧日誌」を福沢諭吉の『時事新報』に寄稿しているし，朝鮮宮中の秘史である『張嬪』(3)の草稿を書いている。その他，冒頭で引用した「朝鮮改革意見」などの数多くの著作や資料を収録した（なかには『漢城之残夢』や「朝鮮遊覧日誌」なども再収録されている）『故紙羊存』（全七冊）も残している(4)。晩年の彼は『福沢諭吉伝』（石河幹明著，岩波書店，1932）の第三巻「第三十五編朝鮮問題」の一部に自分の証言を入れており，自らは『福沢諭吉の朝鮮御経営と現代朝鮮の文化とに就いて』（東京：明治印刷株式会社，1934）や『金玉均君に就て』（中島司編，東京：朝鮮中央協会，1937）を書いている。彼の伝記としては『井上角五郎君略伝』（古圧豊編，東京：森印刷所，1919）と『井上角五郎先生伝』（近藤吉雄編，東京凸版印刷株式会社，1943）がある。

彼の著作や伝記の中には，朝鮮滞在中における内外情勢，朝鮮の内政と対日政策，日本の内政と朝鮮政策，そして彼の周辺人物の言動や日朝両国の政界の裏話を伝える内容などが含まれている。他方，その中には，彼の功名心や記憶の錯誤などが投影されたと思われる誇張，誤謬の部分が含まれている。それゆえ，彼の著作と伝記は額面どおりにはうけとれない。彼の活動や見聞の考察に

際しては，他の関連資料を参照または引用して，その誇張と誤謬の部分を正すとともにその見聞記録の真偽を確かめなければならない。

しかし，問題は対照し得る他の関連資料がない場合があることである。井上角五郎は，日朝両国の政界の裏を見ており，周辺人物の言動や裏話を直接・間接に見聞し，記録することができる立場にあった。したがって彼の見聞記録の中には，他の史料や公式記録にはない，あるいは，それと相反する事項も少なからず含まれている。なかでも，甲申政変の関連記録をみれば，1884年の春から朝鮮では反清的かつ親日的な雰囲気が強まり，高宗は対清独立の意志と対日依存の意向を表明していた（ただ，これは他の資料にも見える）とか，政変には福沢諭吉（また，後藤象二郎らの在野の自由民権派）はもちろん，井上馨と伊藤博文（長州派の官僚）が深く関わっていたとか，政変の改革案には，金玉均が『甲申日録』に記録した14カ条の政綱以外にも数多くの案件が含まれており，なかには閔妃の廃庶人と張嬪の擁立というものもあったとか，政変の善後処理をめぐる日清両国の交渉が天津条約の締結に決着されるまで，穏健開化派の金允植や金弘集は日清開戦に（対清独立の）期待をかけていたということなどである。

これらの事項は，他の史料や公式記録によって真偽を確認し難いとはいえ，ただちに誇張あるいは誤謬であるとは言えない。否，むしろ他の資料や公式記録より信憑性の高いものだと言えなくもない。井上角五郎は政界の裏を見ていたからこそ，また民間人という自由な立場であったからこそ，公式記録や他の史料には表わせない（場合によってはそれを覆し得る）歴史的な事実あるいは歴史の裏の真実を伝えている可能性もあるからである。換言すれば，彼の見聞記録は――なかには誇張と誤謬が含まれているにもかかわらず――歴史心理学的な深層（本音）を「表象」しているということである。それを丹念に調べ，その深相を追求すれば，普通の歴史的な叙述はできない新しい解釈を見いだすこともできるであろう。

前述したように，朝鮮は1880年代に入って開化・開国の政策を本格的に推進し始めた。がゆえに，その「熱病」にかかると共に内外の情勢変化に伴う末曾有の変局を経験していた。もっともこのような事象は，朝鮮に限らず，近代の大転換期に入った諸地域とくに非欧米地域の国々では，「普遍的」に見えるものであったと言える。ただ，朝鮮の場合は次のような特殊性をもっていた。さしあたり三つの特殊性を取り上げたいが，同時に，それぞれに関わる歴史理解の問題を喚起しておく。

まず，朝鮮の開化・開国は，東アジア諸国の中で（世界でも）最も遅く開始された。言うならば，朝鮮の近代（化）は日本に比して20年ないし30年を遅れていた。この時差は，事実上，後に朝鮮近代の「遅れ」や失敗（？）と日本近代の「進み」や成功（？）を招く要因の一つとなった。ところで，問題にしたいのは，こうした両国の近代化の過程と結果によって日本の「先進」，朝鮮の「後進」という神話が創造されたことである。そして，朝鮮の「伝統＝負，歴史＝停滞」という図式が生まれると同時に，日本の伝統は朝鮮より進んだ要素をもち，しかも発展的だったという覚束無い観念が作為されたことである。これらのいずれも，いわば「日本型」オリエンタリズムを表象している。それは色々な形へと変容しつつ，内から外へ，上から下へと浸透し拡散していった。さらにその一部は朝鮮にも伝わり，共有されるとともに，それが「朝鮮型」オリエンタリズムの形成とも結合（異種交配）した。井上角五郎自身も，「日本型」オリエンタリズムから――それが「非道く」変質される以前の初期形態であったと言えるものの――自由ではなかった。

次に，朝鮮の開化は，日本の文明開化とは異なる性格をもっていた。それは，欧米文明こそ文明だとする欧米中心的な近代主義でもなければ，朝鮮文明こそ文明だとする「偏狭な」中華意識に基づいた伝統主義でもなく，両文明の負の側面を止揚し，正の側面を調和しようとする近代化であった。穏健，急進の開化路線に沿って言えば，相対的に前者が伝統主義へ，後者が近代主義へと

傾いていたとはいえ，両者は概ねこうした開化を目指していたと言える。換言すれば，朝鮮の開化は「反近代の近代」の性格をもっていた。

しかし，朝鮮の開化の実験は失敗（？）した。というより，それは，保守的で後進的な近代化と見做されて，結局，日本の帝国主義によって失敗させられた。言い換えれば，朝鮮は儒教文明を保守しつつ改新し，伝統にも近代にも正と負，普遍と特殊が混在するという観念に基づいて近代化を推進していたが，それが，当時の近代には，保守的で後進的なものと見做されたのみならず，日本の「力」によって押さえつけられたのである。井上角五郎は，急進開化派に招かれて朝鮮の開化の実験の一段階に加わったもののその過程で，さらにその後，志の裏表を変えながら，結局――否，そもそもの始まりから――朝鮮の植民地化の助力者，立役者の役割を果たしたのである。

最後に，朝鮮の開化は推進の初期段階から間もなく，諸外国（中でも，日清両国）の利害対立の渦の中で行われた。どの国においても，開化の推進（特にその初期）段階には否応なく内部の混乱を伴うわけであるが，朝鮮はそれを自ら収拾し，開化の基本路線をある程度の安定した段階まで落ち着ける時間の余裕あるいは「息をする空間(breathing space)」を持つことができなかった。その要因は，不利な順でいうならば，日清両国の勢力競争，清国との朝貢関係の強化（それが負の要因として作動してしまった面において），そして欧米諸国と日本の帝国主義の進出などである。ただ，欧米諸国の場合，朝鮮に対する利害関係や関心度は比較的に低かった。ゆえに，その帝国主義的進出といっても，日本に比してそれほど用意周到なものではなかった。例外的にロシアが朝鮮に対する領土的，政治的な野心を持っていたものの，それは，日清戦争までは英国や清国，日清戦争後には英国と日本の牽制を受けた後，日露戦争の敗戦によって挫折した。このようにロシアを除いた欧米諸国の対朝鮮進出が消極的なものであったということは，結果的に，日本による対朝鮮進出の積極化，そして朝鮮の植民地化を助長してしまったということになる。

三　朝鮮入国の動機と目的

日本は――少なくとも日清戦争に至るまでは――朝鮮の自主・独立，改革・開化を唱える形で，朝鮮に対する政治的，経済的，そして文化的な進出を試みた。井上角五郎の朝鮮滞在中の活躍は民間人の文化的な進出の典型であったと言える(5)。また，彼は直接間接的に日本の官僚や政治家とも関係を結び，時折，日朝両国の政治外交面の連絡や交渉の仲介の労を取ったこともある。その意味では，彼は日本政府の政治的な進出を助けていたとも言える。日本の「朝鮮進出」といっても，その動機や目的においては，井上角五郎と日本政府との間にとうぜん異同があり，お互いに合致したり，分離したりする。

井上角五郎が朝鮮に入国した動機は，特命全権大臣兼修信使朴泳孝一行(6)の要請とそれに応じた福沢諭吉の推薦によるものである。一行は帰国前に福沢と会って開化のための優先課題を相議した。その際に福沢は，第一に留学生の派遣，第二に新聞の発刊を勧めた。そして一行は新聞発刊を支援すべく日本人の派遣を要請し，福沢は牛場卓蔵，高橋正信，井上角五郎らを推薦した(7)。つまり，彼らの日本人は朴泳孝らの（急進）開化派の開化路線を助けるために朝鮮へと向かったわけである。その意味で，井上角五郎の入国は「純粋な」動機や目的で行なわれたと言えよう。しかしながら，福沢も井上角五郎も，朝鮮の開化派にとっては「不純な」動機や目的をもっていた。

福沢は牛場，高橋，井上らを朝鮮に送る際に書いた論説（『時事新報』）の中で次のように述べている(8)。

> 今日朝鮮の関係より支那人に対するの方略は，富強の道固より怠る可らず，財政整理せざる可らず，兵備拡張せざる可らずと雖も（略）唯学者の本色を以て支那人に対し又朝鮮人を誘導せんこと，特に牛場君に希望する所なり。（略）蓋し人の常談に国威を海外に耀かすと云へば，唯兵馬の遠

略のみに解する者多しと雖も，国威の耀やく，単に兵力のみに依頼す可らず。学問上の力を以て人心の内を制すること亦甚だ大切なり。或は之を学問の文権と云ふも可ならん。我輩の素志は文権を拡張して文威を海外に耀に在り。

つまり，支那（清国）と朝鮮に対する方略には文武両面があるが，差し当たって「文権」で朝鮮に進出しようということである。そこには，朝鮮を（文明へ）誘導することは日本人の使命という意識や，一種の日朝提携論というべき発想がある。注目すべきは，そこで「国威を海外に耀かす」という立場に立つ福沢は「兵備拡張」「兵力政略」も有力な方略と見ていることである(9)。

井上角五郎によれば，彼の朝鮮入国に際して，福沢は次のように述べたという(10)。

僕は朝鮮をして完全に独立させたいと思ふ。たとへ独立し得るとも或は然らずとも，兎も角も日本以外の国々をして断じて朝鮮に手を出さしめる訳には行かぬ。日本が独り之に当るのが日本の権利であつて亦その義務である。（略）

我々はこの場合〔清国の分割または分裂〕に於いて猶退いて一小孤島を守つて我慢が出来るであらうか。若し進んで足を大陸に掛け，欧米各国の勢力を駆逐するのを考を持たなかつたなら，一小孤島すらその独立を脅かされるかも知れぬ。

近東に於いて支那も朝鮮も共に強力一致して西力東漸の勢ひを防ぐべきである。

しかし少なくとも朝鮮を我が勢力範囲の下に置いて緊密に提携し，万一にも支那と同一の運命に陥らしめるやうなことがあつてはならぬ。

これが為に武力は最も必要である。しかし武力の事は之をその当局に任せるとして，文力もまた大いに必要である。

おしなべて上の論説とほぼ同じ内容である。ただ，ここには，朝鮮の「独立」

に触れながらも朝鮮に「手出し」するのは日本の権利かつ義務であるとか，「朝鮮をわが勢力範囲の下に置いて緊密に提携」する必要があるとし，いわば朝鮮進出論や日朝提携論の内容が具体的に説かれている。それこそが，井上角五郎の朝鮮入国の動機でも目的でもあった。

朝鮮への出国を祝う送別会で，井上角五郎は自ら次のように述べている(11)。

> 諸君，朝鮮を開発し誘導して日本と同じく文明開化の針路に向はしむるは我々今回渡韓の目的とする処で有る，（略）朝鮮は日本と同じく開化に進み日本流となり日本化し支那より今日の如く干渉を受けず謂ゆる独立の一国たらしめる，若し彼に独立の資力なしとせば寧ろ日本の善政を布き日本の徳教を行ふ是が我々結局の目的で有る，僕の今日渡韓するのは此の目的を果たしたいからで有る

これを見れば分かるように，井上は福沢のいうような朝鮮進出論と日朝提携論，そして朝鮮の清国からの独立を述べている。そのうえ，彼は「日本の善政を布き日本の徳教を行ふ是が我々結局の目的」とも述べている。これは，福沢が「朝鮮をわが勢力範囲の下に置いて緊密に提携」すると述べたことの意味（その本音）を明らかにしたものであると言っても差し支えなかろう。引き続き，井上は次のように述べている(12)。

> 大言壮語は書生の常である先輩諸君は之を咎めぬ事と信ずるから敢て一言を加へる，僕は今日に於て日本満三十歳以上の人物を皆な死したい夫れはナゼか大院君乱〔壬午軍乱〕後我が日本は朝鮮と和約〔1882年8月30日の済物浦条約の締結〕し支那の所為を全く不問に措いた，若し少年のみの日本で在つたら僕の今日の旅行も或は内地同様の感ある事なりしならん

まさに「大言壮語」であるが，そこで井上のいう朝鮮の「内地」化すなわち植民地化は，送別会に集まっていた日本人の共有する暗黙の合意であったとも言えよう。送別会には「福沢先生を始め同窓の先輩が多く列席せられ」ていたのである。

四　変容と回帰

前節で述べたように井上角五郎は，すでに朝鮮入国の当初から，彼を招聘した開化派の「純粋さ」とは甚だ違う「不純な」動機と目的をもっていた。もちろん，その中には開化派の「純粋さ」と共鳴しうる部分，すなわち朝鮮の開化と独立，日朝提携などの「純粋な」動機や目的が含まれていた。ともあれ「純不純」の境界は場所や時間によって変わり得る「柔軟さ」あるいは「曖昧さ」をもつ。換言すれば，情勢の変化や人間の作為などにより，「純不純」は互換可能性をもつわけである。その互換可能性を「不純から純粋へ」と傾斜することは，何よりも井上自身の意志によるのは言うまでもないが，朝鮮の開化派のもつ「力量」にもかかっていたとも言える。

朝鮮滞在中の井上角五郎は朝鮮の政治，社会等などの状況を見ても，その「よさ」よりは「悪さ」に注目し，さらなる改悪可能性を強調することが多かった（彼の著作を見れば分かるが，その例示は省く）。その動因は彼のもつ「不純さ」，そして前述したが，「日本型」オリエンタリズムなどにあったと思われる。また，彼が日本で培ってきた（欧米）文明の精神や伝統への批判精神も，さらに朝鮮の開化派のもつ自己批判（精神）もその動因となったであろう。とくに急進開化派は，その質的な差こそあれ，ある程度オリエンタリズムを共有していた，と思う。彼と急進開化派との間には，こうした精神の面でも共鳴しうる部分はあったわけである。

そもそも井上角五郎であれ開化派であれ，ある人が朝鮮の「悪さ」に注目したということ自体は，それが改善策を求めるためのことである限り，もっともな行為である。事実上，開化派はもちろん，朝鮮政府もその改善策を求めていた。そして，朝鮮滞在中の井上はその一翼を担って相当な功績を残した。たとえば，井上が甲申政変に「加担」したことはともかく，前述した二つの新聞発

行への助力の他にも，『伝記』によれば，彼は「外衙門〔外務省〕の顧問」，「国民教育振作の檄文」の起草，「漢諺〔漢字と朝鮮文字〕混合文体の創始」，「奴婢世役の解放」，『列国政表〔万国政表〕』の漢訳，そして南部視察旅行後の調査書類（第一「行政租制調査書並びに其の改革意見書」第二「地方産業開発調査書」）の提出などの功績を残したという(13)。これらの活躍は，その「純不純」を疑う余地もなく，朝鮮の自主的な改革，開化を助けたいという使命感の表れであったと言える。あるいは，井上が付き合っていた急進開化派や穏健開化派の好意，期待に答えようとする彼の「純粋な」熱意，忠誠心の発露であったとも言える。

しかし，帰国後の著作を見るまでもなく，井上が朝鮮南部旅行の際に書いた「朝鮮遊覧日誌」の中には朝鮮の「悪さ」に注目し，さらなる改悪可能性を強調する表現が数多く含まれている(14)。『伝記』によれば，彼は南部旅行を終えた後，その結論として次のように述べたという(15)。

> 朝鮮の私が旅行した地方は，此の李氏〔朝鮮〕の天下となつてより常に圧制を受けたのであつて，土地は荒廃し，人民は怠惰となつて居るけれども，気候と地味とは之を我が中国地方又は九州地方等に比するを得べく，若し灌漑交通の利便を開き，加ふるに農業の方法を改善するに至らば処々に開拓すべき原野も亦甚だ多く，現在の住民を二倍乃至三倍するも我が内地より帰つて猶ほ余裕を感ずるならんと云ふのが私の意見であつて，私は我が国の食糧問題より見ても，人口問題より考へても，之を決して他国の手に委してはならぬと主張して止まなかつたのである。

このように，彼は朝鮮の「悪さ」と改悪可能性だけではなく，「よさ」と改善可能性をも観察し認知していたわけである。しかし，その「よさ」を改善する課業は――朝鮮の自主的な開化，開発によってではなく――あくまで日本の「手に委して」行なうべきだということである。日本に帰国するに際して彼は再び朝鮮入国の前の「不純さ」へ回帰したのである。

おわりに

井上角五郎は日本に帰国して以来，時折，日本の対朝鮮政策と朝鮮の改革や開化に関心を示していた。彼と朝鮮の友人の関係も形を変えて継続した。そこには彼の「純粋さ」も「不純さ」も混在していたであろう。しかし，朝鮮が苦境に立てば立つほど（逆に日本が国権を拡張し，植民地を拡大するにつれ）「純粋さ」は建前として表を飾り，逆に裏に隠れていた「不純さ」は本音として表面化した。朝鮮への関心も朝鮮人との関係も，あくまで日本の対朝鮮国権拡張（と植民地化）や植民地政策（とその延長線上の政策）を前提にするものであつたと言わざるをえない。とくに彼の朝鮮の独立への関心はいつのまにか姿を消してしまった。彼が朝鮮の改革といっても朝鮮の独立といっても，それは「偽善」に過ぎなかったということを自ら証明したわけである(16)。

前述べたように，井上角五郎は日清戦争中，朝鮮の甲午改革中に「朝鮮改革意見」を提案した。その中で，彼は次のように述べている(17)。

> 我国維新以来未だ三十年に至らずして政治文物凡百の制度の今日の如く改良進歩したるは固より種々の原因ある可く又た一は日本人種の支那朝鮮に比較して大に勝る所あるに由るならん

つまり，日本は維新以来，素早く改良進歩したのに対して，朝鮮や清国では未だに遅々として進まないが，その要因の一つは人種の優劣にあるということである。後半部には当時ヨーロッパで流行っていた――ゴビノー（J.A. de Gobineau）のような人の――人種主義理論の影響が見える。ところで，前半部で彼は維新以来の改良進歩を語っているが，そこには，前述したが，朝鮮であれ清国であれ日本であれ，開化政策を推進するに際して，その「熱病」にかかると共に内外の情勢変化に伴う未曾有の変局を経験したことに対する理解などは見えない。実は，開国後の日本も，幕末維新期に至るまでの20年以上にわ

たって，様々な試行錯誤や混乱，そして戊辰戦争，西南戦争のような内戦などの苦境を経た。しかも維新後の日本は，朝鮮や清国の改良進歩を阻害する役割も果たしたのである。

「朝鮮改革意見」の結論部では「只だ用ゆるに兵力を以てす可きのみ是れ余の一大果断を要すと所謂へる所以なり」とした上，「若し夫れ此の改革を実行するには専ら朝鮮人を以てすべきか将に日本人を用ひて総裁たらしめ以て改革の事務を行はしむ可きか」という問いを発して「己に井上伯の大使として派遣させられたるに当たりて徒らに彼是いふの要を見ず」と述べている(18)。すなわち，朝鮮の改革は日本の兵力を背景にして日本人の主導によって行なうべきだということである。

1905年4月2日，井上角五郎は玄暎運という朝鮮人と共に総理大臣の桂太郎を訪れた(19)。当時は日ロ戦争中で，日本の勝利がほぼ確実になっていた時期である。前半の1904年2月23日に日朝両国は日韓議定書という一種の攻守同盟条約を結んだが，なかには「東洋の平和」(第一条)，「皇室の安全」(第二条)，「独立及領土保全」などの文句が謳われていた。しかし，日本側は次第に朝鮮(1897年以来，大韓帝国）の保護国化，植民地化の政策に乗り出し，同年8月22日には強制的に第一次日韓協約を締結し，そこで日本人によるいわゆる顧問政治(20)が始まった。当時の朝鮮の運命は否応なしに日本の処分に任されている状態だったのである。当時，玄暎運がどうして日本に滞在していたのかは定かでない。ともあれ，玄暎運は朝鮮への帰国の前に「教訓，処世の心得」(21)をもとめるかたちで桂を訪れ，日本政府の対朝鮮政策の方針を探ろうとしたと思われる。

井上角五郎は「玄氏は懇に総理の訓戒を謝し深く感銘する事を誓ひ進んで韓国現在の事情を語り以て韓国皇室のため人民の為に切に希望する所ありたり」と記している(22)。玄暎運はおそらく風前の灯のような朝鮮の運命を救う一抹の希望を桂に託し，朝鮮（君民）の安全と独立の保障をお願いしたであろう。

これに対して桂は，実に冗長な「訓戒」をした後，（朝鮮の）皇帝に伝えても「可なり」とし，「第一皇室安全第二財政整理第三外交取締」という三つの「急務」について次のように述べている[23]。

> 我国は飽迄も皇帝を尊敬し皇室を安固にし李氏の社稷は決して之を動かさぬ決心なれば皇帝には安心せられたし是れ第一なり，（略）余は財政の整理を必要なりとし是の故に財政に目賀田顧問を派遣したり是れ第二なり，（略）是〔朝鮮政府が今まで清国やロシアなどの外国に対して曖昧な態度を取ってきたこと〕は往々抜き差しならぬ葛藤を惹起すに至る者なり是の故に外交を取締るため更に一外国人〔スティーブンス〕を顧問に勧めたり是れ即ち第三なり，

このように，桂はあたかも日本政府が朝鮮の安全と独立のために努力しているように見せ掛けて，実は日韓議定書や第一次日韓協約の内容を繰り返しているのみである。

桂は今後の方針をちらりと見せつけるような「訓戒」を付け加えている[24]。

> 我国は其自衛上何時迄も之〔朝鮮政府の親ロもしくは親清のような反日政策〕を今日以前の如く其の儘に措く能はざるなり（略），併し〔日本が日清戦争と同様に朝鮮のために日ロ戦争を遂行しているのに〕日露戦争の依て起る処は韓国に一定の方針なきが為なれば，今後は之を其の儘に放任する事能はず日韓議定書は成れり，（略）余は此の協商に対し更に之を拡張するの必要あるに至る可しと信じ居れり，

しかも，桂は「之に反する者あらば韓国は仇讐なり一度は恕するも之を二度する能はず」という「脅迫」をするかたわら，三つの「急務」は「皇室の為にも人民の為にも必要にして詰り韓国の幸福なり」という「説得」をしたのである。引用文の「更に之を拡張するの必要ある」とは，日本政府がもっと強力に朝鮮の保護国化を企てていたことを意味する[25]。これに対して玄暎運は「之〔三つの「急務」〕を実行するは韓国官吏なり」と語り始めたところに，桂は

「夫れは分って居る併し夫れは韓国官吏の自由なり勝手にす可し，唯だ茲に余に結局の一言あり」とし，もしそうすれば，それは「結局自分の損なりと諦むるの外なし」と玄暎運の語を責め立てたのである[26]。

井上角五郎はこの「桂総理大臣訪問記」の末尾に次のようなコメントを付けている[27]。

> 玄氏よ一身を持する須らく万事徐々にして速かに功名を得んとする勿れ，桂伯の自ら経験する所を以て玄氏に告げられたるは玄氏の幸福なり豈に知己の感なきを得んや，然りと雖も桂伯の意見に到っては玄氏の是を聞く事を得るもの啻に玄氏の幸福のみに止まらざるもの在るを信ず，韓国は現に危急に瀕せり

後の文章から解読するが，桂総理のいう意見の本音が分かる井上角五郎の判断によれば，日本による朝鮮の保護国化という「危急」はもはや後戻りできない現在の勢，運命である，したがって朝鮮（人）もどうしようもない抵抗を諦めて自分の勢，運命を「幸福」だと思い，それを受け入れよということである。それを受け入れたはずだから（？），わが友人の玄暎運は「幸福な」人である。願わくは，玄暎運は（「幸福」に陶酔して）日本の対朝鮮政策の推進過程において「速かに功名を得んとする」ことなく，「万事徐々に」活躍してもらいたいと解読してよかろう。さらに井上角五郎は「玄氏よ去って韓国に帰り直言正行して世に容れられざる事あらば亦た我国に来たる可し」という「友誼（？）」を忘れなかった[28]。ただ，玄暎運はその後どのように行動したか，筆者は分からない[29]。日本政府は同年11月17日に朝鮮の外交権を剝奪しかつ内政を統監する（初代統監伊藤博文）ための第二次日韓協約（乙巳条約）を強制的に締結し，その後も一連の「脅迫による条約」を締結して朝鮮の植民地化を完遂した。これに対する井上角五郎の反応は記録がないゆえに分からないが，それを想像するのは難しくない。

1　山口四郎編『故紙羊存』第一（東京：弘文堂，1907年）所収，44—62頁参照。

2　これについては，拙稿「朝鮮の開化初期新聞に関する一考察」（『北九州大学外国語学部紀要』第86号，1996年3月，所収）を参照

3　問題は『張嬪』の内容の信憑性である。『張嬪』は井上角五郎がその草稿を福地源一郎に渡し，福地の手稿によって潤色された政治小説である（1894年12月に発行されたが，ただちに発行禁止処分を受けた）。すなわち『張嬪』は，朝鮮宮中の秘史を主な内容としており，しかもフィクション化されたものである。それゆえ，その内容を確認することも，そのまま信用することもできない。が，だからといって，その内容をまったく事実無根であるとするのも性急な判断である。たとえば『張嬪』の中には，下記したような「閔妃の廃庶人と張嬪の擁立」という案件を含む甲申政変の改革案が登場する。この案件（と他の改革案）は，政変の目標と性格や政変前後の朝鮮近代史の展開を鑑みれば，その信憑性なきにしもあらずと言えよう。その他にも，『張嬪』は大院君の摂政期から1885年（閔妃が張嬪を殺したとされる年）までの朝鮮宮中の裏話を生々しく描いているが，なかには歴史学の検証と解釈が必要な内容も少なくない。

4　桜井義之によれば，『故紙羊存』は1907年より1911年の4か年間に随時刊行されたもので，第七篇に至っているが，その後の刊行は不詳である，おそらく「第七」を以って終刊と思われる，いま「第五」を缺き参照するを得なかったという。そして，彼は所蔵していた（と思われる）六冊の目次を紹介している（『朝鮮研究文献誌——明治・大正編——』東京：龍渓書舎，1979，12—13頁）。故桜井教授は東京経済大学の図書館（桜井文庫）にその「第五」を除く6冊を寄贈したはずであるが，なぜかその図書館には「第四」と「第六」「第七」の3冊が欠落している。「第四」だけは他の大学や研究所にも所蔵されたものがあるが，「第六」「第七」は筆者が調べた限りどこにもなく所在不明のままである。「第六」「第七」の目次をみれば，収録された資料の中には史料的価値が非常に高いものも含まれていると判断される。が，その欠落を惜しむのみである。

5　井上角五郎が朝鮮滞在中にどのような活動をし，何を見聞したかについては，もう一つの拙論を書くつもりである。そのためには，彼の朝鮮滞在中の活動や関連著作を調べることだけでなく，彼の帰国後の行跡を追うことが必要だと考えている。帰国後，彼と朝鮮（人）との関係はまったく切れてしまったわけではなく，むしろそれが彼の一生を方向づけたといっても過言ではない。とくに帰国してから1年後の1888年，彼は井上馨と伊藤博文が甲申政変に深く関わっていたことを記した機密文書の作成・配布の件で逮捕され，（福沢諭吉ととも

に）裁判にかけられ，投獄（約1年間）されたわけである。が，この一連の過程からは，甲申政変後，彼が朝鮮の朝廷に政変の原因の隠された真相をどのように暴露したかを読み取ることができる。これによって甲申政変の起因に関する様々な解釈を試みることや，さらに，甲申政変の意義と限界を様々な角度から説くことができるのである。1889年2月に出獄した井上角五郎は後藤象二郎，星亨らの大同団結運動に参加することによって政界に入門し，翌年の90年11月には衆議院議員に当選した。彼は1924年に落選し，政界から引退するまでの34年間（十四期連続当選）を政治家として活躍した後，1938年に没した。その間に彼と朝鮮（人）との関係は形を変えて継続した。

6　修信使一行は，正使朴泳孝，副使金晩植，従事官徐光範，随員金玉均，閔泳翊，尹雄烈らで構成された。彼らは，日本に入国してから王命により国旗（太極旗）を製造し，日本の官僚はもとより，欧米各国の領事，公使とも交遊するなど，自主外交，積極外交を展開した。また，彼らは日本の文明開化，殖産興行，富国強兵に熱い関心を示した。彼らは一行の従者を留学生として残し，（たとえば，朴裕宏と朴命和は慶応議塾で語学を習得した上で，前者は陸軍士官学校，後者は同人社に留学した）同人社の留学生であった尹致昊に英語学習を命ずる一方，慶応議塾に留学していた兪吉濬を伴って帰国した。一方，金玉均，徐光範らは日本の内政視察や新借款の交渉のために暫く居残り，1883年4月，朝鮮に赴任する英国公使アストン（W.G. Aston）と共に帰国した。

7　その他，一行とともに入国した日本人は，軍事教練の教師松尾三代太郎，原田一，植字工の真田謙蔵，三輪広蔵，木工の本多清太郎であった。が，新聞発刊の補助人の牛場と高橋，軍事教練の教師松尾と原田らは――朝鮮政局の変動などにより――徐載弼らの留学生（1883年5月～1884年6月頃）が日本に派遣された際に，一緒に帰国してしまった（松尾と原田は甲申政変の際に武器を携帯して戻り，政変に参加した）。

8　「牛場卓造〔蔵〕君朝鮮に行く。」引用文は『福沢諭吉全集』第八巻（岩波書店，1970）505―6頁。

9　福沢は既に『通俗国権論』（1878年9月），『通俗国権論二編』（1879年3月），『時事小言』（1881年9月）などを書き，その中で，いわば国権拡張論やアジア進出論を展開したが，そこで「兵備拡張」「兵力政略」などを主張していた。その後には『時事新報』の論説などを通じて同じ趣旨を述べていた。ここで1882年3月の論説「朝鮮の交際を論ず」の一部を引いておく。

我輩が斯く朝鮮の事を憂て其国の文明ならんことを翼望し，遂に武力を用ひ

ても其進歩を助けんとまでに切論するのは，唯従前交際の行き掛りに従い勢に於て止むを得ざるのみに出たるに非ず。今後世界中の形勢を察して我日本の為に止むを得ざるものあればなり。(略) ……亜細亜東方に於て此首魁盟主に任ずる者は我日本なりと云はざるを得ず。我既に盟主なり。(『福沢諭吉全集』第八巻，30頁)

10　『井上角五郎先生伝』35―6頁。

11　「渡韓の目的」，『故紙羊存』第一の1―2頁。

12　同，2頁。

13　『井上角五郎先生伝』第二章を参照。

14　「朝鮮遊覧日誌」は『時事新報』の第1477号（1887年1月5日）から第1541号（同年3月21日）までの間に不定期的に連載されている。『故紙羊存』第三にも再収録されているが，それは慶尚道の普〔晋〕州までの収録であり，それ以降の釜山までの日誌は欠落している。

15　『井上角五郎先生伝』 114頁。

16　これについては，或者は意地の悪い疑問を抱いているかも知れない。たとえば，井上角五郎の「偽善」，否，日本の「偽善」は当時の弱肉強食時代には止むを得ない「仕様がない」ものではないか。当時の日本（人）の「偽善」を見抜けず，それに騙されたとすれば，その責任は朝鮮側（の開化派）にあるのではないか。第一の疑問，すなわち日本の「偽善」の善し悪しを（どのように）問う（べき）かというのは，それこそ世界近代史にも当てはまる歴史哲学的な大問題である。その答えは省くことにしよう。第二の疑問に対しては，たしかにその責任の一部は朝鮮側（の開化派）にあると言っておこう。これもそう簡単には答えられない，多角的な分析・検討を要する問題である。これについては，急進開化派に限って筆者の見解を一言で言うと，彼らは日本（人）に「騙された」という側面はあるものの，その「偽善」を見抜いていなかったとは思わない。逆説のようだが，急進開化派はその「偽善」を見抜いていたからこそ，日本（人）に頼って甲申政変を起こしたとも思われる。

17　前掲書『故紙羊存』第一，49―50頁。

18　同，61―62頁。

19　井上角五郎と玄暎運はいわば同門であり，一緒に『漢城周報』の発刊に携わったことのある友人でもある。玄暎運は1883年8月から1885年8月まで慶応義塾に留学し，帰国後に間もなく博文局の主事になって『漢城周報』の発刊に加わった（『大韓帝国官員履歴書』ソウル：国史編纂委員会1973，383頁。彼は玄

昔運の兄弟あるいは親戚であると思われるが，詳細な経歴については分からない。因みに，玄昔運は日本語の通訳官として朝鮮でいう（正三品以上の）堂上訳官にまで昇った人物である。玄昔運については，1875年に釜山訓導（日本人との交易関係を指導する官吏）となり，76年には日朝修交条約の締結（2月）の実務を担当し，同年4月から6月まで日本を訪問した第一次修使金綺秀一行に随行したことなどが知られている。

20　財務顧問は目賀田種太郎，外交顧問は（1874年の征台事件に自ら参加し有名な親日派として名を挙げて以来，日本政府のための数々の貢献をしていた）米国人のスティーブンス（Durham W. Stevens）が任命された。スティーブンスは在任中，朝鮮の外交権奪取の下工作に協力するかたわら，親日世論づくりのために積極的に行動した。1908年に帰米し，新聞紙上に親日の持論を発表して在米朝鮮人の憤激を買い，サンフランシスコのオークランド駅で朝鮮の義士田明雲，張仁煥により射殺された。

21　「桂総理大臣訪問記」『故紙羊存』第一，63頁。

22　同，64頁。

23　同，66―67頁。

24　同，67―68頁。

25　ここで暫時，桂は井上角五郎に「此の事は二三韓国官吏に談話し近頃李容翊氏に語りたることありたれども彼等は帰て之を皇帝に言上せざりし者の如し」と述べたが，これに対して，井上は「尚ほ総理の意見を筆記して玄〔暎運〕氏に持たせ帰して差閊なきや」と問い，桂の承諾を得た（同，68―69頁）。桂は（井上も）当時の日本の対朝鮮政策に対してはほとんどの朝鮮人（官吏）が反対していることを承知していたに違いない。そして井上は，おそらく玄暎運は親日的だろうと思い，玄を通して桂の意向を朝鮮の皇帝に伝えようとしたのである。

李容翊は壬午軍乱時に閔妃の避難を助けてその信任を得，地方官を経て中央の数々の要職に就いた人物である。1904年1月に軍部大臣，そして度支部（大蔵）大臣となったが「親ロ反日」の外交路線にたち，日ロ戦争直前には局外中立宣言を発し，日韓議定書にも反対した。このため日本に連行され，約10カ月間抑留生活を送った。帰国後は普成専門学校（現高麗大学校）を創立し，再び要職に就き，目賀田顧問と鋭く対立した。その後，ロシア，フランスの協力を得るため密かに出国し，上海・パリ・ベルリン・ペテルブルグを歴訪した。出国後に第二次日韓協約が締結されたため，帰国することなく，ウラジオストッ

クに居住した。1907年，皇帝（高宗）による万国平和会議への密使派遣（ハーグ密使事件）に関与した後，ウラジオストックで病死した。

26　同，69頁。

27　同，70頁。

28　同。

29　もっとも玄暎運が帰国後に「親日行脚」をしたとは考えられない。彼が「実行するは韓国官吏なり」と語った際，その「実行」の中には朝鮮の保護国化や植民地化が入る余地はないばかりかその余地を封鎖しようとする意図を含まれていると思われるからである。彼は桂や井上のような日本人の「偽善」を見抜いていたと判断される。

ただ，話は変わるが，当時の朝鮮（知識）人の中には日本（人）の「偽善」に騙された（？）人々もあった。その代表例として李容九という人物がある。彼は東学教徒の指導者の一人であったが，教団から追放された後に一進会の会長となった。彼は，1906年に赴任した韓国統監の伊藤博文，赴任に際して随行した黒竜会会長の内田良平らの日韓併合工作に協力し，1909年には「合邦請願書」を提出したのである。彼の意図としては，「合邦」によって植民地化による亡国をまぬがれ，開化の進展をはかろうとするものだったが，日本帝国主義に対する認識の甘さを生み，「強制併合」の露払いという売国的な役割を果たす結果となった。彼は日本の「偽善」を善だと勘違いしていた，否，そこから善を醸し出そうとしたのであろう。しかし，1910年「強制併合」の直後，朝鮮総督府は朝鮮人のあらゆる団体を解散するに際して，もはや利用価値がなくなった一進会をも強制的に解散させた。2年後の1912年，李容九は失意のうちに死んだと伝えられる。

「強制併合」後，日韓両国（人）の間で「善偽善」を判断する基準は善とともに失踪する。そして偽善は「逆偽善」を生み，そこにも偽善の悪循環の輪は生成する。時に偽善は善を装う。時たまに偽善は善への変容を試みる。が，いずれまた偽善は（逆）偽善を生み成す。善自体は偽善の「装い」も「変容の試み」も拒まずにいるが，偽善は自ら善を生み出すことができない。換言すれば，偽善は自らの粉飾，努力だけではなく，他者（との関係）の善の助力があってこそ，しかも自らの自己否定によってのみ善への「入定」を果たすことができる。もっとも偽善は他者の善もそもそも自分と同様な「偽善」だと思うものである。